

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内に事業所の理念を掲示し、朝の申し送りの際に確認している。	「利用者が毎日安心して生活する事ができ笑顔で充実した日々を送れるように支援します」というホームの理念が玄関に掲示されている。職員が使用するトイレに貼り紙(認知症介護の基本・注意事項)があり、職員個々の振り返りの機会もある。理念に反するような言動は少ないが目立った時はその場で注意をするようにしている。職員は理念を十分理解し業務に就いている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	近くのお寺に散歩に出かけたり、行事の際には地元でお弁当やおやきを購入し、地域とのつながりを持つよう心がけている。また、地元の小学生との交流会も行っており、今年度は3年生と楽しい時間を過ごすことができた。	区費を支払い回覧板も届けられ区や市の行事を知ることが出来ている。区長からはホームの行事案内等を告知する時に回覧板の使用を許されている。地域の小学3年生との交流が行われ、児童が水戸黄門の紙人形劇を披露してくれたり、折り紙を一緒に作ったりしている。また、1・2年の児童が遠足帰りに立ち寄ってくれたり、地元のボランティアが不定期で訪れている。11月の長野県北部地震の際には区長や近所の方が安否確認に来てくれた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入所希望でお問い合わせいただいたご家族・見学にこられたご家族の相談にのっている。また地元で行われる認知症に関するセミナーにも参加し、地域の方が認知症に対する理解を深められるよう協力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回のペースで開催。参加者は、介護保険課、民生委員、地域包括支援センター、区長、利用者家族など。会議にて区から要望のあったAEDを設置した。現在は施設前の道路に横断歩道を設置の動きがある。	2ヶ月に1回、概ね月後半の午後開催している。家族、区長、民生委員、市職員、地域包括支援センター職員で構成され、利用状況や活動状況を報告し、意見交換している。他のグループホームや施設の情報を聞き、当ホームの運営の参考にしている。区より近隣住民(約30人弱)の災害避難場所として使用したいとの依頼があり、備蓄も多めに用意している。	家族に参加の呼びかけをしているが、家族の都合と折りあわず平成26年度は家族の参加を得られていない。家族が出席できるように開催日や時間帯等の工夫を望みたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	主に運営推進会議においてお話をいただいている。空室情報・地域の勉強会・交流会などで連携を取らせてほしいと要望し、認知症セミナーへの参加につながった。	地区で行われた民生委員やケアマネージャーを対象とした認知症セミナーに発表者として参加した。日頃から市へ聞きたいことなどを常にメモにして、運営推進会議の時や電話連絡の時に聞き渡しがないようにしている。介護保険の更新申請は家族が市へ提出し調査時にはホームで対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「拘束をしない介護」を実践している。マニュアルは職員がいつでも目にする事ができる場所に置き、常に意識してケアに取り組んでいる。拘束を希望される家族がいた場合にも、入所時に「拘束をしない介護」について説明し、理解をいただいている。	外部研修受講者が会議を利用して伝達研修を行い、全職員で共有化を図っており、職員は身体拘束のないケアの重要性について理解している。日常生活の中で車椅子やベッドの状態を見ながら具体的に「こんな状態は拘束になるから注意しよう」と職員同士で話している。「帰宅願望」の強い利用者もいるが様子を見ながら職員と一緒に散歩や自宅のあった周辺まで行くなど、気分転換できるようにしている。	

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	行動だけでなく言葉の虐待にも目を向け、社内研修・勉強会などを通じて職員に発信している。また、常に目に付くところに虐待防止を促す掲示物を貼っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者様の中には成年後見人制度を利用している方や今後利用予定の方がいるため、職員が制度を理解して支援できるよう法務省のパンフレットをテキストとして利用している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約の際、ご家族と一緒に契約書の項目一つ一つを読み上げながら一緒に確認し、理解・納得をしていただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	訪問記入用紙に意見欄を設け、気軽に要望を提示してもらえるよう努めている。頻繁に面会に来られないご家族には、電話で利用者様の様子をお伝えする際に、意見や要望をお聞きしている。	利用者の多くが自分の言葉で意思を伝えることができる。家族の来訪も3日毎、週1回等、様々であるが、来訪時の訪問記入票には苦情、要望などは書かれておらず、感謝の言葉が多く記入されている。訪問された時や電話での連絡の際に直接、家族の意見を聞いている。一人ひとりの利用者のくらしぶりを伝える「かえて通信」が毎月家族の元へ送られている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	運営やケアに関する問題点や疑問点は、課題管理表やユニット会議を通じて、全員で解決に導く環境を作っている。	ユニットの担当職員は流動的に配置している。職員の居室担当が決められ利用者の誕生日や衣類の入れ替えなどを担当している。ユニット会議が月末に1回行われ、利用者の状況や業務に関する連絡等があり、課題を話し合っている。方針として現場で働く職員の提案を聞き入れる体制が築かれている。職員も積極的に見直しや改善等の提案をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個人面談にて職員ひとりひとりの声を受け止め、職場環境の改善などに繋げている。今年度より人事考課表を使用し、各自掲げた目標に向かって向上心を持って取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	他の事業所と合同で、認知症に関する研修を開催している。また外部の研修を受けた職員による勉強会を行い、受講した者と同等のスキルが身につくようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	相互の訪問には至っていないものの、市内で行われる勉強会などに出席して、交流を持つように心がけている。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時より利用者様に寄り添い、不安を軽減し、要望を汲み取れるような関わりをもつよう心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時に、ご家族様と面談の時間を十分に取し、不安や要望をお聞きしながら関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人、ご家族との面談をする中で「どういったことを今必要としているか」を探るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	できるだけ利用者様の残存能力を活かせるような関わり方をしている。入浴やお茶の時間など、日常生活の中でゆっくりと会話が楽しめる関係づくりを心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者様の写真を載せた毎月の「かえて通信」は、日常の様子がよくわかると、ご家族に好評。ご家族とは密に連絡を取り支援に参加していただいている。面会や外出・外泊にも制限はなく、ご本人の状態についても適宜連絡を取りお伝えしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	いつでもどなたでも面会に来ていただける体制ができていますので、利用者様のご家族・ご友人・近所の人など様々な方が訪問される。入所後も手紙や電話などで、これまでの友人や親戚と連絡を取っている利用者様も多い。	友人や近所の方の訪問があり、手土産などを頂くと家族へも連絡をしている。携帯電話を持ち家族や知人と連絡を取っている利用者もいる。亡くなった奥さんのお参りにどうしても行きたいという希望を家族に伝え自宅までお参りに戻った方もおり、お盆のお墓参りやお正月の外出、親戚への訪問等もできる範囲で支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士の相性を見極めたり、座る席に配慮して淋しさを感じないように支援している。利用者様どうしてコミュニケーションが取ることが難しい場合は、職員が間に入って支援している。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、適宜ご家族からの相談に応じている。(在宅へ戻った方の介護相談など)		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人が希望する生活ができるよう、日常の会話や心身状態の観察から、意向の把握に努めている。ユニット会議・カンファレンスでは、サービスが本人のニーズに沿ったものであるか話し合いを行っている。	家族より生活歴の聞き取りをしている。職員は話しかけにより表情や反応などを見て会話の糸口を見つけている。入浴介助時の1対1の時などに普段話さない利用者の父母の思い出話を懐かしそうに話してくれることもあり、職員間で共有し普段の支援の中に活かすようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族様から頂いた生活歴・情報を共有し、日々の関わりの中に活かした支援ができるよう心掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	「ご本人ができる部分」「支援が必要な部分」を見極められるよう、状態観察を行っている。観察から得られた情報は、統一したケアが実践できるようにスタッフ間で共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ユニット毎にモニタリングを行い、カンファレンスを行っている。また、面会時などに家族の意向を伺って、プランに反映させている。	毎日の申し送りに書かれた内容をユニット会議で話し合い、計画作成担当者がプランを作成し利用者、家族に説明している。長期目標は6ヶ月、短期目標は3ヶ月で見直している。利用者全員のケアプランの要点を1枚の用紙に書き出し、職員が毎日使う申し送り表にファイルし、常にケアプランの確認ができるようにしている。状態に変化の見られた時にもその都度見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	プランに沿ったサービスの提供が行えているかを確認するため、記録用紙とケアプランの一覧を一緒にファイリングしている。記録は勤務した職員全員で記入している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人はもちろん、ご家族の要望も把握し、柔軟性を持ったサービスが提供できるように努めている。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	畑作りや近隣への散歩を通じて、地元の自然に触れ合ったり、地域の方々とコミュニケーションの機会を持てるよう支援している。先日の地震の際には町内会のたちが、施設に被害がなかったか確認に来てくださった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族からの希望がある場合、医師と契約し往診を利用している。ご家族付き添いで受診の際には受診用シートを使用し、施設～病院～ご家族間の記録・情報の共有を行っている。	ホーム利用前からのかかりつけ医を継続されている方がおり、術後の定期受診のために関係の医療機関に通う方もいる。協力医による往診がほぼ一人ずつ毎日のようにあることから家族や利用者の希望で協力医に変更する方もいる。基本的に通院は家族にお願いしている。歯科医の往診による診察や診療も希望すれば受けることができる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設内の看護師に正確に情報が伝わるよう、報告や申し送りの記入を行っている。緊急時には、看護師とすぐに連絡が取れる体制を整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	主治医の所見により、緊急時の受診・入院の受け入れがスムーズに行えている。利用者様の入院時は、随時病院と連絡を取り、情報を提供してもらっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の利用者様に関しては、ご家族と十分な話し合いを持ち方針を決定している。ケアに関してはカンファレンスを行い、スタッフ全員が同じ対応を行っている。	平成26年度は2名の方の看取りがあり、医師、職員で話し合い対応を決め終末期をすごされて旅立った方と終末期の対応を話し合う前に旅立たれてしまった方がおりそれぞれであった。看取りについては利用者、家族、医師、職員でその都度話し合いをして方針を決めている。退院後終末期への対応が必要となった場合にも改めて話し合いを持ち同意書をいただく。現在ホームでの看取りを希望されている方もいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアル、フローシートを活用している。今年度より入口にAEDを設置し、全員が使用できるようにした。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災ボードを使い「万一災害があった場合、自分は何をするか」出勤時、各自確認している。	年2回訓練を予定し、11月には昼間想定避難訓練を利用者も参加し行った。地域の避難場所は別に定められているが災害時の避難場所としてホームを使わせてほしいと地域から依頼された。スプリンクラー、非常用電源、自動火災報知機等が備わっている。非常時の備蓄は地域の方の分も含め多めに蓄えている。	次回の夜間想定訓練には地域の方にも参加をお願いしているが、実状を把握していただき、いざという時に協力をいただけるような働きかけを期待したい。

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ひとりひとりの生活歴をつかみ、人格を尊重した声掛けに努めている。記録には他利用者の個人情報に記載しないよう配慮している。	総合的な研修で学んでおり、利用者は目上の方という意識で接し、親しくなっても馴れ馴れしくならないように気をつけている。名前や苗字に「さん」付けで声かけている。プライバシー保護という点から、ホーム便りも一人ひとりの利用者ごとに作成している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「どんな生活をしたいか」はもちろんのこと、衣類を選ぶ・飲み物を選ぶ等、日常生活で「選択の自由」が持てるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の気持ちを優先し、やりたい時にやりたいことができる環境づくりに勤めている。レクリエーションだけでなく、起床・食事・入浴・就寝等も、できるだけ本人の意思を尊重して柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整髪・髭剃り等の基本的なことはもちろん、衣類を選ぶ・お化粧をするなど、その人らしくメリハリのある生活が送れるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理、味見、盛り付け、片付け、それぞれができることを分担して食事作りを行っている。また、畑で取れた野菜は、できるだけ多くの利用者が参加して調理を行う。	特別な行事食を除きユニット毎に異なるメニューを提供している。同じ食堂で食べているので「明日は、あのお魚もいいね」というように利用者からの希望を聞くことができる。利用者にもそれぞれの出来ることに関わりを持っていただきお手伝いをお願いしている。食事の前に嚥下体操をし利用者と職員が一諸に食べている。郷土食のおやきを皆で作ったり、近くの道の駅でお弁当を買ったり、回転寿司を持ち帰り全員で食べている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	医療職と連携しながら、最適な食事量が提供できるよう職員間で統一している。水分摂取量があきらかに少ない方は、こまめに声かけをする・好みの飲み物を提供するなどして対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	清潔保持のため毎食後口腔ケアを促し、自力で行うのが難しい利用者様には仕上げ磨きを行っている。義歯を外した際は、職員が汚れや傷を点検している。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄介助の必要な方にはトイレに付き添い、できるだけ失敗を減らすよう支援している。それぞれの排泄パターンを把握するため排泄チェック表を使い、トイレ誘導・パット交換を行っている。	寝たきりでオムツ使用の方が若干名いるが、殆どの方は布パンツやリハビリパンツを使用している。時間で声掛けしたり様子を見てトイレまで一緒に行くなど一人ひとりにきめ細かい対応をしている。病院や自宅で使用していたこともあり、また、トイレが居室から少し遠いという理由で夜間のみポータブルトイレを使用している方もいる。利用開始時にリハビリパンツだった方が布パンツとパットへと改善した事例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェックを行い、必要に応じ医師・看護師に相談する。便秘がちな方も、水分量・食事・運動などで、できるだけ自然な排泄が行えるよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	最低限の入浴日の設定はあるが、本人の入りたい日・時間帯に極力合わせるよう努めている。拒否がある場合は無理強いせず、別の曜日や別の時間帯にするなど、柔軟に対応している。	機械浴と一般浴があり、1週間に3回の入浴を予定している。利用者の健康状態や気分によって変更することもある。1回30分ぐらいの時間を掛け、利用者が出来ることは見守り、介助を必要とした時に手助けをし会話を楽しみながら入浴している。ゆず湯、菖蒲湯、リンゴ湯は利用者に人気がある。家族と日帰り温泉に行かれる利用者もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の良眠を妨げないよう、日中の活動量に配慮している。夜間のみならず日中も定時に訪室し、快適な環境か(温度・湿度・匂いなど)チェックしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬を防ぐため、二重のチェック体制を取っている。服薬の度に、名前・日付・時間を読み上げ、間違いのないように注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	張り合いのある生活が送れるよう、レクリエーションを行っている。料理・掃除・草むしり・裁縫など、それぞれにあった役割を提供できるよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買い物やドライブ、散歩など多くの利用者が外出できるようにしている。ご本人の体調に問題がなければ、自由にご家族と外出していただくことができる。	天気の良い日に近所の散歩や買い物に交代で出かけていたりしている。行事外出やドライブなど2~3名ぐらいで出かけている。花見や紅葉狩りなど、市内の各所にある公園や隣村へ時期にあわせて外出し楽しんでいる。家族が来訪した時にも声を掛け、外出行事への参加をお願いしている。	

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在は行えていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族やお友達と、手紙やはがきのやり取りしている利用者様も多い。ご家族の理解があれば、自由に電話をしていただくこともできる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日中もこまめに訪室を行い、温度や湿度などをチェックし、心地よく過ごせるよう配慮している。壁にはイベントの写真や利用者様の作品などを展示して、季節を感じたり、会話のきっかけになるよう工夫している。	居間兼食堂は2ユニット共同で使用している。南側のテラスは広く天気の良い日にはテーブルを並べお茶や食事を楽しんでいる。訪問時にはテラスにりんごが置かれ小鳥たちが食べに来ていた。共有スペースには大きなお内裏様とお雛様が飾られ、ユニット毎の利用者の顔写真も貼られていた。廊下にはユニット毎にソファが置かれ、小学生と交流した時のスナップ写真が飾られていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下にソファを置き、歩行時にちょっと休んだり、気の合うお仲間とおしゃべりができる空間を作っている。暖かい季節には自由にテラスに出て、自然を楽しめるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人に馴染みのある家具や衣類、写真などをお持ちいただいている。衣替えの時期には、職員と一緒に衣類の入れ替えを行っている。	備え付けのベッドと収納庫があり、家から椅子、テーブル、ダンス、飾り棚等が持ち込まれ使いやすいように配置されている。壁にはカレンダーや行事の時の写真、家族の写真、利用者が作った折り紙やぬり絵の作品などが飾られていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自立した生活が行えるよう声掛けに配慮し、居室入口にはわかりやすく名前を表示している。		